

技能士研究会での活動

豊田一也氏の今治タオル業界への貢献で特記すべきは、四国タオル技能士研究会（現・今治タオル技能士研究会）での活動である。同会の一連の活動も豊田氏が初代タオルマイスターに任命された理由のひとつである。

四国タオル技能士研究会は、第1回目のタオル織機調整国家技能検定が実施された翌年の1973年4月21日に四国タオル工業組合内に創設され、国家技能検定1級の取得者から構成された（1999年に会員資格の要件が見直され、国家技能検定1・2級取得者および入会希望者に変更された）。そのおもな目的は、①タオル製造に関する講習会の開催、②見学・研修、③技能検定の実施などであり、創設初期には『織機調整法』（1974年）、『製織の条件』（1975年）、『タオル織物製織と分解の手引き』1・2巻（1979年・1980年）などのテキストを発刊している（辻悟一『えひめのタオル 85年史』四国タオル工業組合、1982、383頁；四国タオル工業組合「組合ニュース」第10号、1971年6月7日；四国タオル工業組合「昭和46年度事業報告」13-14頁）。


豊田氏は、1990年4月から2013年3月まで四国タオル技能士研究会の役員を務めた。20年以上におよぶ役員生活のうち1996年4月から2000年3月までの2期4年間を同会の会長として、同会の発展に中心的な役割を果たした。会長職に就いた際にとりわけ尽力したのは、技術者の立場の向上であった。豊田氏が藤高で大事に扱われたように、「タオルメーカーの発展に技術者の存在は不可欠であり、タオル業界において技術者をもっと大切にしたい」という思いがそこにはあった。優れた技術者の存在は、地元のみならず全国の織物産地の活性化にも繋がる。事実、今治に豊田氏がいることで、紀州や播州など全国の織物産地から技術者が来今して豊田氏に意見を請うことが多々あった。織機を改良・改造したり新製品を開発したりする際に、豊田氏のアドバイスをわざわざ聞きに今

治までやって来るのである。モノは消費者の手に渡って初めて生きるものであるが、モノをゼロから生み出すのはこうした技術者である。

会長職を降りてからも、1991年廃止の国家技能検定に代わる厚生労働省認定社内技能検定制度の創設に向けてリーダーシップを発揮した。そして、2011年に厚生労働省の認定になった「四国タオル社内技能検定試験」の運営委員会のメンバーとして、また首席検査委員（首席検査委員は2013年まで）として後進技能者の育成指導をおこなった。同会での活動は2021年の現在もつづいている。

四国タオル技能士研究会での活動と同時に、豊田氏にとって貴重な経験となったのは、当時藤高の社長だった藤高豊文氏の代わりに四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）の役員会会合やJFWジャパンクリエーションなどの大きな展示会に参加したことであった。こうした交流の機会をとおして、みやざきタオル（株）の故宮崎弦氏、池内オーガニック（株）の池内計司氏、渡辺パイル織物（株）の故渡邊利雄氏など今治のタオルメーカーを代表する個性溢れるリーダーと親しくなった。この頃を思い返すと、懐かしい思い出が今でも心に残っている。

振り返れば、勤続 62 年

藤高に入社して2021年で62年の月日が経った。振り返ってみると、1959年4月に同期で入社した8名のうち3名が60歳の満期定年まで働き、その後も顧問として最後まで藤高に残ったのが豊田氏である。豊田氏は、親しみを込めて「大将」と呼んでいた創業者の藤高豊作氏から5代目社長の藤高豊文氏に至るまで、5人のリーダー  のもとで藤高のタオルづくりを支え、藤高の歴史とともにタオル人生を歩んできた（藤高豊文氏については「タオルびと」2013年4月号～7月号を参照）。

現在は週に一回のペースで本社に赴き、若い世代の指導にあたっ


ている。「最初はついつい知っていることを全部教えようとしてたんですが、あとで『難しい話だけで何にもわからなかった』と言われて、これはいかんかったなと反省しました。」そこでふと気付いたのは、豊田氏も入社直後そうであったように、教わる側が知りたい気持ちにならないとなかなか頭に入らないし、一方的に知識を与えてもわからないことの上塗りになるだけである。この反省から、最初はざっと説明をしたあとに「どこまでわかった？」「どこかわからんところないか？」などの声掛けをしている。そして今、豊田氏自らの経験と知識を集大成した、タオルの全生産工程を総合的に勉強できるようなテキスト・資料作成に取り組んでいる。



1962年に藤高に導入された豊田織機製のタオル専用ジャカード機GT-II型85インチ復元織機を前に解説する豊田一也氏（左上）現在はコンピュータ化されているが、当時は紙製のパンチカード（紋紙）が使われていた（右下）

現在は後進の指導にあたりながら、幼少期の頃に家の手伝いに明け暮れ大嫌いになった農業に勤しんでいる。広い田畑に、米や野菜を育てている。野菜は今までで100種類ほど育てた。しかも有機に

こだわる。「スーパーなどで売っている野菜よりも美味しく安全な野菜」をモットーに、なるべく化学肥料も農薬も使わず、そのための知恵と時間は惜しまない。たとえば、米ぬかや油粕、骨粉、魚粉、牡蠣殻などを混ぜて発酵させ、アミノ酸化した肥料をつくっている。タオルづくりも野菜づくりも、とことん納得のいくレベルに昇華させるのが豊田流である。豊田氏を職人の道に導いたのは家業である農業の手伝いがきっかけであったが、幼少期の農業での苦しい経験はモノづくりにおける忍耐と面白さを知らぬ間に教えてくれたのかもしれない。

豊田氏は歴史にも興味があり、今治史談会  に参加して豊田家の歴史について資料を渉猟している。興味の発端は、母親のよしこ氏である。母親の本名は豊田ヨシ子氏だった。母親は、「ヨシ」という名前が大嫌いだったため、自ら戸籍上の名前を「よしこ」に改名した。そんな行動派の母親は歴史好きで、以前豊田家の歴史について調べていた。その影響もあり、豊田家の家系に興味湧き、今治史談会の活動をとおして調べてみると、どうやらルーツは長門国と呼ばれた山口県にあることがわかった。山口県下関市に豊田町という地名があるが（現在は「豊田大領 とよたしやなだ 豊田氏館跡」と刻まれた石碑を見ることができる）、この辺りを治めていた豊田氏の歴史と豊田家は深い関わりがある。この地で「豊田」を最初に名乗ったのは、延久年間（1069-1074年）における豊田まけなが輔長と言われている。

では、長門国から瀬戸内海を挟んで伊予国へはどのような経緯で繋がりができたのか。時は南北朝時代（1336-1392年）、豊田氏14代種秀のあとに後継者問題が勃発し、実子の種家と養嗣子種世が家督を争った。その結果、種家は敗れて伊予国の二神島ふたがみしま（現在は松山市）に流され、豊田氏を改めて二神氏を名乗るようになった。豊田から二神への改名時期は明らかではないが、二神氏が伊予国を拠点として足場を築いていったことは間違いない（愛媛県編さん委員会『愛媛県史』資料編（古代・中世）、愛媛県、1983年、愛媛県編さん委員会編『愛媛県史』（古代Ⅱ・中世）、愛媛県、1984年）。豊

田氏の歴史探索はこのあともつづき、豊田家の本家の系図によると、松山市にある新^{しんたかて}高手山城にたどり着く。そこから先は探索中である。

4. 若者へのメッセージ

「やりたい」「したい」という気持ちで、挑戦すること

「大切なのは『やらされている』のではなく、『やりたい』『したい』という気持ちですね。何事も自分から挑戦してやってみると、気が付きます。」このメッセージには豊田氏のタオル人生が詰まっている。「言われたとおりにうまくできたことを評価する今の世の中では難しいですが、自分から挑戦して努力してみないと面白味もないし、達成感もないとおもうんですよ。達成感は大事です。」

現在は、藤高で企画や営業を担当する若い世代に、タオル製造に関する専門的な知識を教えているが、「知識や技術を教えることは難しく、あるいはムダで、それよりもその人のやる気を引き出すことの方が大切だ」と豊田氏は言う。しかし、タオルづくりの全体を熟知しているのは豊田氏しかいない。事実、豊田氏の指導を受けている若手のひとは、「製造全体を見渡せるのは豊田さんぐらいで、なくてはならない存在」とコメントしている（「愛媛新聞」（朝刊）2014年9月15日、30面）。

5. 好きな言葉

失敗を恐れるな！

豊田氏のタオル人生は、「失敗」と「挑戦」の連続であった。「失敗を恐れるな！」と自らに言い聞かせながら、あくなき挑戦をつづ

けてきた。失敗したり、ムダなことをしてみたり、遠回りに見えても次の一步に繋がる。失敗にはヒントが隠されており、「失敗」してもあきらめず挑戦すれば、そこから必ず学べる。豊田氏は、現役時代に月平均で1つのサンプルを作成し、生涯では数えきれない新しいデザインのタオルを生み出してきたが、ヒット作は失敗作の上にあった。

藤高に入社して4年目の時に、豊田氏はタオルづくりに没頭し始める。たくさんの試行錯誤を重ねて、たくさんのタオルをつくる過程で、「いつも失敗せんように教えられてきたし、自分もそうせないかんとおもてたけど、失敗というのはすごくいろいろな面でヒントがあって、新しいものは失敗から生まれたものがいっぱいある。そやから、これが正しいというのではないんやな」と考えるようになった。

豊田氏のタオルづくりにかけた情熱とタオルづくりにかけた時間は並大抵ではない。「石の上にも三年」と決めて藤高でタオルづくりを始めた豊田氏が、「^{めんへきくねん}面壁九年」の努力をつづけ、藤高のタオルづくりを支え、今治タオルの発展に貢献してきた。そして第一線を退いた今でも、タオル業界の「^{いちじゆひゃっかく}一樹百穫」のために人材育成に挑戦しつづけている。今自らのタオル人生を振り返り、豊田氏はこうおもう。「タオルの仕事と藤高が好きで長くタオルづくりに従事できたことが幸せです。」

6. よく読んだ本

最近はあまり本を読まなくなった豊田氏であるが、昔は本田技研工業（株）の創設者・本田宗一郎やパナソニック（株）の創業者・松下幸之助の本をよく読んだ。また、地元が産んだ企業家・坪内^{ひさお}寿夫に関する本も好んで読んでいた。

坪内寿夫は、「四国の大将」とも「再建王」とも「船舶王」とも呼称された人物である。1914年の第一次世界大戦が勃発した年に伊

予郡松前町^{まさきちやう}で生まれ、企業家として頭角を表したのは第二次世界大戦後のことである。坪内は両親が芝居小屋を営んでいたことから映画館経営で成功し、造船業でも発展を遂げ、その後数多くの経営再建を請け負って一大企業グループをつくり上げた。坪内の経営者としての手腕は歴史に名を残すところであり、柴田練三郎の『大将』（講談社、1978年）に壮大に描かれている。（完）



柴田練三郎『大将』講談社、1970年

（今治市立図書館所蔵）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

「朝日新聞」（朝刊）2008年10月18日。

阿部克行著、藤高豊文編『藤高タオル百周年史：限りなき変化と継続』2019年。

愛媛県編さん委員会『愛媛県史』資料編（古代・中世）、愛媛県、1983年。

愛媛県編さん委員会編『愛媛県史』（古代Ⅱ・中世）、愛媛県、1984年。

「愛媛新聞」（朝刊）2014年9月15日。

株式会社藤高ホームページ（<https://fujitakatowel.jp>）。

編集後記

2020年8月4日（火）午前10時に（株）藤高の本社（今治市別宮町）で豊田さんのインタビューを敢行しました。いまだ新型コロナウイルス感染症（COVID-19）問題は収束せず、7月以降ますます感染者が全国で増加し、状況は悪化の一途を辿りました。こうした状況のなかで、現地の「タオルびと」制作チームのサポートによって初のオンラインによるインタビューをおこなうことができました。

豊田さんは、藤高とともにタオル人生を歩まれましたが、そこで培われた多くの知識と経験はたいへん濃いもので、タオルづくりに関する博識ぶりには感心させられました。話のなかで、「知識や技術を教えることは難しく、あるいはムダで、それよりもその人のやる気を引き出すことの方が大切だ」という豊田さんの言葉が印象的でした。



オンラインによるインタビューの様子

豊田さんは、初代タオルマイスターに任命され、地元の愛媛新聞や朝日新聞などマスコミにニュースとしてとり上げられたので、産地では有名人です。そんな豊田さんから直接指導してもらえる藤高の若い世代の人たちはラッキーだとおもいます。以前同じく初代タオルマイスターの谷口さんにも「タオルびと」に登場していただきましたが、お二人に共通するのは、モノづくりに対する真摯な姿勢です。そして、謙虚さです。今回はコンピュータの画面越しでのインタビューでしたが、その感覚は伝わってきました。だからこそ、人材育成において上記のような言葉が出てくるんだろうなとおもいました。次回は単なる「感覚」ではなくて、ぜひ同じ空気を吸いながら「肌感覚」で会話できたら嬉しいです。（辻）

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の29人目は、タオル製織技術者の越智康夫氏である。若い

頃は綿織物の会社やタオルのメーカーを渡る歩き、そのたびにスキルアップを図り、いつしかタオル製造の準備工程から仕上工程まで一連の細かい作業をひとりでこなせる技を身に付けた。今回は、この技を武器に現場のさまざまな局面でトラブルを解決してきた越智氏のタオル人生について伺う。

